

平成 24 年度 第 4 回長野県観光振興審議会 議事録

1 日 時：平成 24 年 10 月 22 日（月）午後 1 時 30 分から 4 時

2 場 所：長野県庁 特別会議室

3 出席者

[委 員] 井上弘司、今井明美、岡庭一雄、久保田くに子、佐藤博康、塩島和子、高野和也、竹村元尋、中川完治、渡邊充子（敬称略）

[長野県] 観光部長 野池明登、観光企画課長 浅井秋彦、
信州ブランド推進室長 熊谷 晃、観光振興課長 秋山優一、
国際観光推進室長 佐藤公俊、移住・交流課長 小田切昇、
国際課長 白鳥博昭

4 議事録

（浅井観光企画課長）

ただ今から平成 24 年度第 4 回長野県観光振興審議会を始めさせていただきます。

本日は当審議会の会長であります佐藤委員を始め 10 名の委員の皆さんにご出席をいただいております。駒谷嘉宏委員、高野登委員、玉沖仁美委員、松本猛委員は所用のため欠席をする旨のご連絡をいただいておりますので、ご報告申し上げます。

また、近藤清一郎委員におかれましては、一身上のご都合によりまして、10 月 17 日付でご退任をされましたのでご報告させていただきます。

本日は概ね 4 時頃の終了を予定しておりますので、よろしく願いいたします。

それでは最初に観光部長の野池から挨拶を申し上げます。

（野池観光部長）

観光部長の野池でございます。今日は大変お忙しい中を第 4 回の審議会にご出席いただきまして本当にありがとうございます。

本年度の審議会は、本日を含め残すところ後 2 回ということでございます。本日は、まず、県として現行の観光振興基本計画の進捗状況をまとめましたので、ご報告をさせていただければと思っております。内容は厳しい内容となっておりますが、少しでも目標に近づけるように、本年度全力で取り組んでいるところでございます。

また、新しい観光振興基本計画の方でございすけれども、県内の 10 地域での地域懇談会、東京・名古屋・大阪での大都市圏懇談会などでいただいた様々なご意見を踏まえた「中間とりまとめ」を、会長さんと打ち合せをさせていただいた上で、さる 9 月 21 日に正式に公表させていただいたところでございます。本日は、この「中間とりまとめ」をベースにこれまでのご議論でいただいたご意見を肉付けいたしまして、「答申案たたき台」としてご用意させていただきました。

ご検討いただきたい事項が盛りだくさんでございまして、重点的なプロジェクト

として何に取り組んでいくか、達成目標のあり方、それから、県・市町村・関係団体、事業者や住民の皆さんとどのような役割分担の下で来たる5年間取り組んでいくか、こういった様々な点についてご議論いただくことを予定しております。

審議会も残すところ2回ということで、本日は率直なご意見を出し尽くしていただき、私どもとしてはそれを委員のご提言という形でこれからの5年間の計画にできる限り盛り込んでいきたいと考えていますので、どうぞよろしくお願いいたします。

(浅井観光企画課長)

次に、前回の審議会で新任委員としてご紹介申し上げました竹村元尋委員におかれましては、本日初めての出席になりますので、あらためてご紹介申し上げます。

(竹村委員)

はじめまして。JR東日本長野支社営業部長の竹村でございます。私は地元長野市の出身でございます、よろしくお願いいたします。

経験豊かな皆様の中で若輩者でございますけれども、交通関係の立場ということで指名されたものと思っております。

是非よろしくお願いいたします。

(浅井観光企画課長)

ありがとうございました。

それでは本日の議事に移らせていただきます。当審議会の議長は会長が務めることになっていきますので、佐藤会長よろしくお願いいたします。

(佐藤会長)

皆さんご苦労さまです。

今日は4回目の審議会ということで、先ほど事務局からご説明がありましたように、もう答申に向けてのまとめの議論になっていく段階となっていて、審議も本日を含めて後2回ということです。次回には全員の顔ぶれがそろいますようにスケジュールの調整をお願いしたいと思っておりますので、ご協力をお願い申し上げます。

それでは、今日はまとめの前段階としまして、まずは平成24年度までの現行の「観光立県長野」再興計画の進捗状況を、事務局の方からご説明をお願いいたします。

(浅井観光企画課長)

それでは資料1をお願いいたします。

現行の「観光立県長野」再興計画の4年目となる平成23年度に係る各種の統計調査の結果が出そろいましたので、計画に掲げる達成目標の進捗状況についてご報告させていただきます。

1ページの「1 基本的な達成目標の進捗状況」でございます。基本的な達成目標として4つ掲げてございます。1つ目が観光地利用者数でございます。右に記載した「1億人以上」という目標に対して23年の実績は8,435万人となり、大変厳し

い状況でございます。次に観光消費額、目標「4,000億円」に対して23年実績が3,063億円ということで、これも大変厳しい状況。外国人宿泊者数、目標「37万人以上」に対して実績が20万3千人ということで、これも大変厳しい状況でございます。もう1つの指標が県内の観光サービスに対する満足度、これは目標「50%以上」に対して23年度の実績が47.3%ということで、徐々にですが目標に向かって上がってきているという状況でございます。

2ページをお願いします。ただ今の4つの基本的な達成目標以外にも施策体系別に36項目の達成目標をセッティングしてございます。この36項目の進捗状況を申し上げますと、「達成済」が4項目、「順調」が17項目、「遅れている」が11項目という状況でございます。それから、「実績値なし」という統計の数値が取れずに評価できない項目があり、それが4つありました。これら36項目のうち「実績値なし」を除いた32項目についてみますと、「達成済」と「順調」を合わせて計21項目ということで、3分の2については「概ね順調」という結果でございます。36項目の達成目標については、詳しくは11ページから14ページに指標毎に数字を掲載していますので、ご覧いただきたいと思えます。

計画に掲げる達成目標の進捗状況については、統計数値でみますとこのような状況となっています。全体としてなかなかうまくいっていない要因については、2ページ下の「3 目標達成に向けた取り組みについて」に分析を記載してございます。

(2)をご覧ください。その要因として、人口減少やリーマンショック後の景気低迷を背景とした全国的な余暇市場の縮小、団体から個人への旅行形態の変化や日帰り圏化の進行、それから東日本大震災というような外部要因も大きな要素としてございました。加えて、このような外部要因だけではなく、反省すべき内部要因もたくさんあるかと思えます。内部要因につきましては「中間とりまとめ」で課題ということでこの審議会でもご議論をいただきました。課題ということは、ウィークポイントであり、これまで取組が足りなかったという点だと思います。そういった課題としてまとめた事項、そういった視点での取組が十分ではなかったという反省がございました。以上が達成目標に対する進捗状況でございます。

17ページをお願いいたします。現行の県の中期総合計画を進める中で行っている政策評価の結果を掲載しております。こちらは、総合計画ですので、県のすべての施策分野に渡る評価ということでございますが、その中で観光分野についても評価をしてございます。これが9月に公表されていまして、19ページに観光分野の「主要施策評価調書」があります。2つ目の■で「県の自己評価」ということで、これはただ今説明申し上げたとおりの中身でございます。自己評価では、「達成目標から見た施策進捗度」として「全体的に努力を要する」という評価をしたところがございます。これに対しまして、20ページの下に■に「総合計画審議会意見」がまとめられています。こちらでは、「県の自己評価は「妥当」である。」とした上で、更に、「長期にわたる経済不況に加え、東日本大震災、原発事故等の影響により、観光地利用者数が減少する中、新たな観光振興基本計画の策定が進められているところであるが、長野県の持つ強み、魅力を活かしつつ、地域の観光事業者等との連携を図り、引き続き誘客促進の取組を推進されたい。」という意見をいただいております。

評価の方法としましては県の自己評価、それに対する総合計画審議会の評価により構成されています。

資料1については以上でございます。

(佐藤会長)

ありがとうございました。ただ今ご報告がありました「観光立県長野」再興計画の進捗状況について、時間をとらせていただいて皆さんからご意見を承りたいと思います。ご報告いただいた数字や経緯について、ご意見やご質問等ありましたら、この場で提起していただきたいと思いますが、いかがでしょうか。

資料1の1ページと21ページをご覧ください。現行計画では、この審議会での議論を踏まえて、最終のゴールとなるべき達成目標が設定されているわけですが、この5か年の流れをみると結構アップダウンがありまして、例えば観光地利用者数は平成21年の9,174万人、観光消費額も同年の3,349億がピークとなっている。それから外国人宿泊者数は平成22年の30万5千人がピークとなっている。観光の場合は人の動きや世の中の色々な事件や経済的環境によって大きく影響を受けるわけですが、その中で5年の中でどこがピークとなっているのか、そしてそのピークの数字はどういう数字なのか、そういうことを思いながら僕は見させていただきました。そうすると、おそらく目標をどの位まで達成したのかという数字に少し見直しが入るのではないかという感じがしています。5か年の計画ではどうしても5年目の結果が重視されるのですが、そのためのプロセスも是非重視すべきだと僕は思います。5年の間に何ができて何ができなかったのかということも含めて、今後の5年を議論する場合でもそうしたプロセスも頭に入れて欲しいという印象です。

皆さんいかがでしょうか。とりわけ県内の観光サービスに対する満足度は、ほぼ達成目標に近いのですが、ここにきて急に満足度が上がったことについて事務局では理由は整理していますか。

(浅井観光企画課長)

資料1、1ページ右下のグラフをご覧ください。平成21年秋から「さわやかにもてなそう県民運動」を全県的な運動として取り組んできました。そういったものの成果が徐々に表れてきたのではないかと、因果関係を説明するのは難しいので断言できないのですが、そういった成果も出てきたのではないかと分析しております。

(佐藤会長)

ありがとうございました。

渡邊委員をお願いします。

(渡邊委員)

私はどちらかと言うと現場にいる立場から申し上げたいと思います。

この数字が示すようにお客様の数が少なくなったことによって、私はお客様に向き合う時間ができたと実感しています。どっと押し寄せたお客様が大量に動いて、

そういう時代というのは目の前のことを右から左にこなすだけで精一杯で、お客様と向き合う時間が比較的散漫になってしまっていたと思います。

むしろ、ある程度ターゲットとなる方達がのんびり、ゆっくりと滞在できるスタイルが信州のキーワードだと思っています。昔のように大型バスがどっと押し寄せれば全てが潤うという方向性ではないのではないかと思います。

特に震災がありましたから、お客様と向き合う時間は結構ありました。そこが少なくともプラスになった部分ではないかという感触を現場では感じています。

(佐藤会長)

ありがとうございました。大変興味深いご意見だったと思います。

他の委員いかがですか、では岡庭委員。

(岡庭委員)

このような数字であることは歴然たる事実なのですが、それに対して「3 目標達成に向けた取り組みについて」の(2)にある評価がこのような見方だけでいいのかというのが1つあります。

県内の観光サービスに対する満足度は高まったけれども、結局お客さんの数も消費額も伸びなかったという具体的な事実をどのようにとらえたらいいのか。それと同時に、話を聞くとどこの観光地も非常に苦戦している。そこにはリーマンショックや東日本大震災だけではない、もっと構造的な要因があるのではないかと分析しないと、方向性が違ってしまうのではないかと思います。

もう1つはこの長野県に観光に訪れるお客さんの圧倒的多数が高年齢の50代60代の方であるという点です。人口減少時代をどんどん迎えるに従って、実はこの人達は段々年をとって旅行できない状態になっていくわけです。そういうことを考えて、数字が減ってきている事実の分析がもうちょっと必要だと思います。

現場のそれぞれの観光地がどういう分析をしているのか、このあたりをもう少し捉えて、次期計画を立てるベースとなる調査が必要になるのではないかと思います。

この数字を見て「うちのところと同じだ」、「日帰り温泉の傾向と全くよく似ている」ということが分かった、これは全県的な傾向ではないだろうかと感じました。

(佐藤会長)

ありがとうございました。

確かに数字の後側に何かがあるのか、今、岡庭委員から構造的な変化にもう少し目を向けてはどうかというお話があり、もちろんそこをベースに今後の5年間を検討していかなければいけないと思うのですが、こうした変化について次期計画のたたき台ではどのように分析していますか。

(浅井観光企画課長)

「中間とりまとめ」の第1編第3章に「長野県観光の課題」を掲げさせていただ

きました。

その取りまとめに向けて、例えば、地域経済への貢献の視点が足りなかったのではないか、顧客満足度の向上に向けた取組が足りなかったのではないか、また、新たな観光スタイルへの対応が十分ではなかったのではないかなど、現在の長野県観光の課題についてご議論いただいております。それらを、これまでの5年間の取組として十分ではなかった点と認識しております。今後課題として捉えながら、新たな5か年の計画づくりを進めていく必要があると認識しているところでございます。

(佐藤会長)

岡庭委員のご意見では、この辺りについてもっと深めた分析が必要だということですね。

(岡庭委員)

そうですね。

(佐藤会長)

これを課題のまま放っておくわけではないと思いますし、今後の研究課題でもありますから、課題としてあげて更に深く内容を精査していくことができれば、おそらく今後つくられるプランが、血や肉を備えたいいものになるという気がします。我々もそれを頭に置くようにしていきましょう。委員の皆さんにも是非ご協力をお願いしたいと思います。つまり、情報をたくさん集めて皆さんの頭の中でも分析を加えていただくようご協力をいただきたいと思います。

他にご意見ございませんか、高野委員お願いします。

(高野(和)委員)

先ほど現場のご意見というお話がありましたが、顧客満足度に対する取組というのは、自分たちの旅館業界においてもかなり進んでいると感じています。というのは、販売のネット化が進んでいることがあり、大手のネットサイトには口コミや点数付が表示されるようになっていきます。このため、口コミの点数がある程度取れていないと誘客にも影響があるということもあり、少ない人件費の中で一生懸命にサービス向上に努めているという状況がございます。

ただし、それが売上などに直結しているかと言うと一概にはそうでもなくて、先ほど構造の問題というのがありましたが、オリンピックが終わって以後これまでの10年位の間に急速に団体客の需要が減って全体の需要も減ってきた。各旅館は個人客に対応しようと努力はしているのですが、大型旅館をはじめとして経営が苦しくなって破たんした施設が多かったという状況です。

それだけであれば減った需要に対して少なくなったキャパシティーでうまく対応できたのかもしれませんが、破たんした旅館を企業やファンドなど違う経営者が再生して激安で誘客を展開するようになっています。場合によってはそれらの旅館は

個人客を取り込むために、需要は減ってきているのに宴会場をつぶして客室に変えたりして収容が増えた施設もあります。こうした中で、既存経営者の営業状態が非常に厳しくなっている状況がございます。ですから、ここでは満足度のアップ、売上げの減少という状況が表れていますが、単純に満足度が上がったからいい、売上げが下がったから困るということではなく、既存旅館はかなり危機的な状況にあるということを申し上げたいと思います。

今朝の信濃毎日新聞に金融円滑化法が終わってからのことが記事になっています。金融円滑化法が施行されて1年目の倒産は90件ほどだったのが、今年は半年でもう180件ほど倒産しているということです。この法律の適用を受けている企業が全国で30万社から40万社あるので、来年3月31日に期限が切れたらそれらがどうになってしまうのかということの問題視しておりました。長野県は全国で最大の旅館軒数を誇っておりますが、皆さんが先ほどお話しした状況の中で、危機的な状況にあります。来年4月1日以降どうになってしまうのか、業界としても本当に危惧しています。

ですから、今申し上げたように破たんした旅館が生まれ変わって格安で展開してくる、既存旅館は圧迫されながらも無理をして顧客満足度を上げなければ売れない、ではどうするのかということとコストを下げつつ満足度を上げなければいけない、そういった大きな難しい問題が存在するということ踏まえながら、今後の観光振興計画を検討していただければと思います。

(佐藤会長)

先ほどの構造的という意味はまさにそこにあるのでありまして、今高野委員がおっしゃったように日本一宿泊施設が多い長野県として、旅館経営は果たしてこれでいいのだろうかという問題があります。スキー場の時にもこんなにスキー場があっただろうかという議論がございました。それを含めて構造的な議論をどこかでしていきませんか、潰れそうだから守る、潰れそうだから立て直すという議論になってしまうと、これは県民にも負担になりますし、逆に色々な形で問題が出てくるだろうと思います。

そういう意味では、観光産業の皆さんからもどういう形でランディングさせるか、あるいはどういう形で統合させていくかという議論が出てこない、なかなか議論がかみ合っていないだろうと思います。そういったことも含めて構造的というご意見であったのだろうと私は思いますので、是非満足度だけにとらわれず、単価のアップということだけにもとらわれず、今後は全体の構造を考えていきたいと思えます。

ちなみに、満足度の指標のことだけ補足させていただくと、これは県民を対象とした満足度の指標となっております、以前も指標のつくり方自体に問題があるという議論をさせていただいております。本来ならば県外からのお客さんの満足度が我々にとっては興味のあるところなのですが、そちらには触れていけないという課題がありまして、その辺りはご承知をいただきたいと思えます。

(久保田委員)

達成目標に掲げたこれらの目標値というのは、設定の段階において努力すればなんとか手が届くというレベルだったのか、かなり努力しないと手が届かないというレベルだったのか、その辺りを教えてください。

(浅井観光企画課長)

5年前に目標を設定したのですが、例えば人口が減少するという潮流はあまり考慮していないということから考えますと、非常にチャレンジングな目標設定であったのではないかという印象を持っております。

(佐藤会長)

ちょっと付け加えさせていただきますと、かつて長野県には延べ1億人の観光客が来ていたことが1つのきっかけになっています。そこで1人当たりもう500円お金を使っていただければ当時の最高水準の観光消費額を達成する。さらにはもう1泊滞在してもらえば、平均宿泊数1.49泊を達成するだろう。そういう意味では、具体的な積上げにより算出したものではなく、情緒的につくりだした数字だとお考えいただいた方がいいかと思います。

よろしいでしょうか。ありがとうございます。新しい計画の目標設定をどのように議論するか、これは非常に影響のあるところですので、頭に入れておいていただけるとよろしいかと思います。

それでは、これからは、次年度以降の新たな観光振興基本計画の策定について答申をどのようにしていくかということに話題を絞っていきたいと思いますので、ご協力をお願いいたします。提出資料について、事務局の方からご説明をお願いします。

(浅井観光企画課長)

それでは、資料2「新たな観光振興基本計画の策定スケジュール(案)」をご覧くださいと思います。

現在地が第4回目の審議会でございます。今後は11月にもう1回ご審議いただきまして、11月の終わり又は12月始めに知事に対して答申するスケジュールで作業を進めているところでございますので、よろしく申し上げます。

資料3「新たな観光振興基本計画 答申(案) たたき台 概要」をお願いいたします。本日の中心議題となる答申案のたたき台について、この資料で概略を説明いたします。

1番上に◆が2つございます。ここでは、たたき台を通じた基本的な考え方を、4行にまとめさせていただきました。「長野県への観光地利用者の長期的な減少傾向は、これまでのような大規模なキャンペーンを主体とした対策を講じても劇的な好転が期待できない状況にあることから、施策の軸足を対症療法から観光地や観光産

業の体質改善に転換し、本質的な観光の振興に取り組んでいくことが求められている。」、先ほど議論された構造的な問題への意識からこういった記載をさせていただいております。「このため、新しい計画においては、観光事業者だけではない地域全体での観光地域づくりや信州ブランド戦略の展開をキーワードに、交流人口の拡大と滞在時間の増加をめざしていくことが重要である。」ということで、地域経済にもしっかりコミットする仕組みをつくっていかなければいけないということ、基本的な考え方として掲げたものでございます。

当審議会においては、これまでの3回の審議で第2編第1章までご議論をいただき、その状況を「中間とりまとめ」という形で公表させていただいたところでございます。今回と次回の審議では、第2編第2章「達成目標」、第3編「施策の展開」についてご審議いただくこととなります。第4編、これはエリア別、県下10地域のビジョンとなりますが、こちらは地域ごとに議論していますので、当審議会において議論を深めることはあまりないかと思っております。それから第5編「計画の推進のため」ということで、関係機関の役割分担、計画の検証・評価を行う仕組みなどについて残る2回の審議でご議論をいただき、まとめていきたいと考えているところでございます。

それでは資料4「新たな観光振興基本計画 答申(案)たたき台」をお願いいたします。18ページまでは基本的には「中間とりまとめ」と同様になっています。修正した箇所にはアンダーラインを表示していますので、該当箇所をご説明いたします。

3ページ「5 東日本大震災を契機とした価値観の変化」の2つ目の○、「ゆとりや心の豊かさを実感できるライフスタイルの重要性の高まり」という価値観の変化があったということで、これは字句の修正をしたところでございます。

次に6ページをお願いします。1番下の表について、新しい統計数値が公表されたので表を差し替えたのと、それに伴い文章を若干変えてございます。

次に9ページ下をお願いします。「3 観光産業の現状」で、観光部において観光消費額をもとに経済波及効果を試算いたしました。前回までは観光庁の全国調査の数字を掲載していましたが、今回こちらの試算に差し替えてございます。

次に14ページの「2 信州の暮らしが育んだ観光資源」をお願いします。「サイトウ・キネン・フェスティバル松本や日本を代表する画家の作品を所蔵する東山魁夷館」ということで、固有名詞は記載していないのですが、際立っているものについては強みとして明記すべきではないかということで、このような記載に修正したところでございます。

18ページ、第2編の「第2章 達成目標」をご覧ください。ここからが今回ご議論をいただきたい部分でございます。達成目標については、別に参考資料1を提出しておりますので、そちらの方で説明いたします。

19ページ、「第3編 施策の展開」でございます。これからの5年間、めざす姿の実現に向けてどのような施策に取り組むかということに記載してございます。大きく2つの項目に分けてございますが、めざす姿の実現に向けて、関係者などと一体となって進める「重点的に取り組むプロジェクト」を3つ掲げてございます。当

審議会でのこれまでの議論、それから県の総合5か年計画でもこうしたプロジェクトが議論されていますので、そちらとの整合も図りながら3つのテーマを掲げたところでございます。この3つは「中間とりまとめ」においても掲げてございます。ただ、表記が1箇所だけ変わっておりまして、1番上の「世界水準の山岳高原リゾートづくり」、これは「中間とりまとめ」では「アジア最高の山岳高原リゾートづくり」という表記になっておりましたが、色々と調べましたところ、アジアには海洋リゾートはたくさんありますが、山岳リゾートそのものがあまり有名な場所がない、あったとしても高原の避暑地というイメージであって、長野県がめざしていく高い山をいただいた壮大で雄大な山岳景観というイメージはアジアのリゾートには見当たらないということ、それと現状でも長野の景観ですとかインフラ整備の状況を見ると、アジアの中で既に相当高いレベルにあるのではないかというご指摘もございまして、「アジア最高の」という表記から「世界水準の」という表記に変更したところでございます。

それからその下の「施策体系」ということで、これは県がめざす姿に向けて着実に取り組んでいく施策を5つの施策分野に整理したものでございます。この5つの分野は、前回の「中間とりまとめ」と同じ分類になっております。表記をタイトルだけで趣旨や中身がなるべく分かるように工夫させていただいたところでございます。

それでは施策の展開の内容についてご説明いたします。21ページをお願いいたします。プロジェクト1、2、3と3ページにわたって記載してございます。「趣旨」、「主な取組」ということで、例えば、プロジェクト1では「世界水準の山岳高原リゾートづくり」では「主な取組」を①から④まで掲げてございます。最終の「答申」においては、これらについて、何をやるか具体例を入れながらもう少し説明をしていく必要があるかと思っております。現在事務局でこの辺りの内容を議論している最中ではございまして、現状ではここまでの表現となっております。具体的には、1つ目が「長野県ならではの山岳高原環境の保全」、2つ目が「豊かで美しい景観の保全・育成」、3つ目が「長期滞在のための質の高い過ごし方の提供」、最後に「外国人旅行者の戦略的誘致」としており、このような取組をしていくべきではないかということでございます。

22ページをお願いいたします。プロジェクト2「信州ブランドの磨き上げと発信による観光魅力の向上」でございます。これにつきましては「主な取組」として3つ掲げてございます。1つ目が「長野県観光のアイデンティティの発信」、2つ目が「商品やサービスの魅力の磨き上げ」、最後が「県民総参加のおもてなしによる長野県観光のブランド化」ということで、こちらにつきましても、もう少し説明を加えていきたいと考えています。

23ページをお願いいたします。プロジェクト3「連携と協働による観光地域づくり」でございます。「主な取組」としましては、1つ目が「観光地域づくりの中核となる人材の育成」、2つ目が「観光地域づくりを推進する組織の立上げとその活動の支援」、最後に「滞在交流型旅行商品の創出支援」ということでございます。

「主な取組」については、今日の審議の中で、もっとこういう点に取り組むべき

というご議論をいただければと思うところでございます。

続いて24ページ以降の「第2章 施策体系」でございます。県がとして着実に取り組んでいく施策を、分かりやすく5つの分野に体系化して示してございます。

25ページの「1 観光地域づくりを担う人材の育成」をご覧ください。1つ目の○では観光を担う人材の育成を、2つ目の○では県民や幅広い事業者の参画、観光に対する意識の改革や子どもの頃からの地域学習、3つ目の○では顧客満足度を向上させるための取組について、それぞれ施策の必要性を記載しております。その下の括弧の中は、「主な取組例」として具体的な取組を例示してございます。

26ページの「2 強みを活かした信州観光の質の向上」をご覧ください。1つ目の○では地域全体の情報発信から商品の企画・販売までを一元的に行う仕組みづくり、2つ目の○ではブランドイメージの統一感ある発信、観光資源の価値を創出し発信するための仕組みづくり、3つ目は他分野と連携した商品の造成・販売について、それぞれ施策の必要性を記載しております。

27ページの「3 来訪者にやさしいハード・ソフト整備」をご覧ください。こちらは観光の基盤づくりになります。1つ目の○では自然環境や景観の保全と観光案内所の機能の向上、2つ目の○ではICTの活用や道路づくりなど利便性の向上、3つ目の○では高齢者・子ども・女性の視点でのやさしい地域づくり、このような施策も必要ではないかということで記載しております。

28ページの「4 マーケティングに基づく誘客・交流の促進」をご覧ください。これまでマーケティングの視点が十分でなかったのではないかという意識を踏まえてこうしたタイトルにしています。1つ目の○では市場の視点を的確に把握した、ターゲットを絞った誘客・宣伝に取り組む必要があるのではないかという視点でございます。2つ目の○では交流の促進ということで、観光だけではないMICE、スポーツ合宿や学習旅行の誘致による交流人口の拡大、それから3つ目の○では北陸新幹線の延伸もございましてので広域観光の推進をもっとすべきではないかという視点でございます。

29ページの「5 ゴールデン・ルートに負けない外国人誘致戦略」をご覧ください。1つ目の○では増加傾向にある外国人旅行者の受入体制の充実、2つ目の○では海外からの教育旅行の受入について、それぞれ施策の必要性について記載させていただいたところでございます。施策体系については以上でございます。

31ページの「第4編 エリア別の観光地域ビジョン」をご覧ください。地域ごとのビジョンについては、現在、各地方事務所でやっております地域観光戦略会議などでまとめていく方向で作業を進めております。当審議会において取りまとめる「答申」の中では、2つ目の○にあるように「10圏域ごとに、地域特性を踏まえためざす将来像・施策の展開を取りまとめる必要がある。」というご指摘、それから3つ目の○にあるように「10圏域を越えた広域連携についても、…今後取り組む内容を明らかにする必要がある。」というご指摘で考え方をまとめていただければよろしいのではないかと考えているところでございます。

参考資料2「エリア別の観光地域ビジョン」をご覧ください。資料が前後して恐

縮です。これは現段階の地域ごとの特性や課題をまとめたものでございますが、参考資料という位置づけで配付させていただきました。

資料4のたたき台にお戻りいただき、33ページの「第5編 計画の推進のために」をご覧ください。行政や観光関連団体、事業者など観光には多様な関係者があるわけですが、施策展開にあたっての役割分担についての記載、それから、最後に計画の検証や評価をする仕組みについても「答申」に盛り込んでいただきたいということで記載するものでございます。内容につきましては参考資料の方で説明いたします。

資料5「観光振興審議会委員からの施策提案」をお願いいたします。こちらは事前に委員の皆さんに具体的な施策提案について、よろしければご提言くださいとお願いしましたところ、佐藤会長、松本委員から書面の提出がありましたので、報告させていただくものでございます。このようなことに取り組むべきではないかという具体的なご提言でございます。

次に参考資料1「新たな観光振興基本計画 達成目標の設定」をお願いいたします。これは達成目標についてご議論いただくためのたたき台としてご提示するものでございます。

本日冒頭で現行計画の達成目標の進捗についてご議論をいただきましたが、1の(1)「基本的な達成目標として望ましい性格」では、目標として望ましい性格についてまとめてございます。1つ目の○では「施策展開の成果を総括的に把握できる指標」が望ましい。それから2つ目の○では「アウトプット指標ではなく、…アウトカム指標」が望ましいのではないか、3つ目の○では「毎年把握できる指標」が望ましいということをお示ししてございます。

1の(2)「基本的な達成目標の候補」では、達成目標の候補を7つ掲げてございます。この内4項目は現行計画の基本的な達成目標としているものでございます。それ以外には「③一人1日あたりの観光消費額」、一人あたりの観光消費額に着目したらいかがかということで候補としてあげてございます。さらに「④平均宿泊数」、これも滞在時間の増加をみる指標として候補にあげてございます。それから⑥と⑦が満足度に関する指標となっておりますが、⑥が現行計画で基本目標にしている指標であり、⑦は同じように満足度を測る指標ですが民間会社の調査によるものでございます。これらの候補、これ以外の指標も含めて、達成目標として何が適切かというご議論を頂戴したいと思います。

1の(3)「主な論点」では論点をお示ししてございますが、長期的な人口減少が進展する中で、たくさんの方に来ていただくことを重視するのか、あるいは、人数ではなく1人当たりの消費額を上げることを重視すべきか、この様な点から議論いただき、整理の仕方によっては設定する達成目標も変わって来るのではないかと思います。また、具体的な目標値は、「努力により達成可能なレベルに設定し、毎年度その進捗度を評価することに主眼を置くべき」か、あるいは、観光ですから夢を持って

いただくという意味も含めまして、「挑戦的な高いレベルに設定し、その実現に向けて取り組むプロセスを評価することに主眼を置くべき」か、整理の仕方によって数値目標のレベルも変わってくると思いますので、その辺りについてもご議論を頂戴したいと考えております。

ただ今追加で資料をお配りしました。これは現行計画において観光地利用者数1億人、観光消費額4,000億円という目標を設定した際の考え方をまとめた資料であり、議論の参考としてお配りするものでございます。

続きまして参考資料2「エリア別の観光地域ビジョン」です。これは資料4の説明の中で紹介したとおりでございます。

参考資料3「新たな観光振興基本計画 役割分担の基本的な考え方」をお願いいたします。役割分担についてでございます。基本的な考え方としましては、1番上に2つ〇がございます。「観光振興の主役は、事業者や観光関連団体などの民間であり、行政は、民間の主体的な取組が結実するよう環境づくりや支援を行う。」というのが前提にあるかと思えます。こうしたスタンスを基本としつつ、「県、市町村、事業者、観光関連団体、県民等がそれぞれの役割を担いながら、連携・協力してこの計画を推進する。」ということが基本的な考え方になろうかと思えます。

また、関係するセクターごとに期待する役割を記載してございます。上の5つについて太線の枠で囲ってありますが、これは地域における活動主体となります。下の2つについては、これは県と県の観光協会ですが、全県を対象とする観光主体ということで別の枠で囲ってございます。その中で各主体にどのような役割を期待するかを記載させていただいております。これについても内容についてご議論いただければと思います。

参考資料4「新たな観光振興基本計画 検証・評価の考え方」をお願いいたします。上の四角は現行計画における検証・評価の仕組みでございます。1つ目としては当審議会、それから地域にあります地域観光戦略会議による進捗管理と成果の検証ということで、本日の冒頭の説明はここに記載した進捗状況の報告にあたります。2として長野県中期総合計画、県の総合計画における政策評価の仕組みを活用するとしており、この2本立てで検証・評価をしていくというのが現行の評価制度でございます。

下の四角は新たな観光振興基本計画における検証・評価の仕組みとなりますが、基本的には従来と同様の考え方になっております。①としましては観光振興審議会、当審議会において報告をし、それに対してご意見をいただき施策の見直しに反映しようとするもの。それから②としまして、地域レベルでは地域観光戦略会議において取組状況を検証するというもの。それから③として新たな総合5か年計画における政策評価の仕組み、これを使いながら検証していく。新たな総合5か年計画の検証・評価の仕組みはまだ具体的には明らかになっていません。現在検討中でございますので、ここでは具体的に書けないのでありますが、そちらの方で新しい政策評

価の仕組みができてくる予定ですので、そういったものを活用していくということでございます。

それから参考資料5「新たな観光振興基本計画に対する県民意見募集によりいただいた意見・提言」でございます。これは一般県民の方から7月から9月末まで3か月間にわたり募集させていただきました。メールやファックス、郵送などでいただいたものでございます。1ページは前回の審議会で報告をさせていただいたものでございます。2ページがそれ以後いただいたものでございます。こういったご意見・ご提言についても「答申」の中で、あるいは具体的な計画づくりの中で活かしてまいりたいと考えております。

最後、参考資料6「長野県総合5か年計画（仮称）答申素案」でございます。こちら私どもの観光計画と同時並行して計画づくりが進められているものです。9月3日に答申素案が公表されてございます。そちらの審議と私達の方の審議については整合を図りながら進めていきたいと考えております。

説明は以上でございます。よろしくお願いいたします。

（佐藤会長）

ありがとうございました。事務局の方でここまでまとめていただきました。

本日は「答申（案）たたき台」をいただいていますから、これをベースに今回と次回で「答申」をまとめていくこととなります。そのために参考資料を含めてたくさんの資料が提供されております。これらを委員の皆さんで活用していただいて「答申」に落とし込んでいこうということでございますので、是非ご理解いただきたいと思っております。

そこで、まず資料4の「答申（案）たたき台」を出していただきまして、これをベースに議論を進めていきたいと思っております。今事務局の方からは、18ページまでとそれ以降をニュアンスを変えてご紹介いただきました。18ページの「長野県観光のめざす姿」までは、今のところ変更等加える幅がそれほどないだろうということで、かなり綿密に数字等を含めてまとめていただいております。そこでまずここから特にご異議がないかどうかということも含めて、皆さんからご意見をいただいております。その後で細かな具体案の中身に時間を取らせていただこうと思っております。ところが、いかがでございますか。「てにをは」など若干修正の余地はあろうかと思っております。ところどころ抽象的過ぎたり具体的過ぎたり、バランスがどうかと思う部分もあります。そのような部分は追々事務局と調整をしながら修正を加えたいと思っておりますが、根幹に関わるようなポイントで異議がございましたらお願いしたいと思います。

（高野（和）委員）

質問よろしいでしょうか。

これは何のためにつくる計画かと申しますと、この計画は今後5か年間、長野県が様々な観光施策を実行していくよりどころとなるのだと思うのですが、その中で、例えば民間団体とか業界団体でやりたい取組が出てきた時に、この計画に対応する施策が載っているのご協力をお願いしたいという話になってくるものだと思うので、第2編第2章の施策体系の具体的な部分が1番気になります。

例えば、宿泊施設の方で経営に関する研修が必要と考えた時に27ページに「⑦宿泊業者など観光事業者の競争力の向上に向けた取組の支援」となっているので協力をお願いしたいとか、あるいは、以前県民の意識醸成のために子どもの授業に観光という科目をつくったらどうかという意見を出させていただいたことがありますけれども、例えば25ページに「②県民の観光に対する意識醸成と子どもがふるさとの素晴らしさを学ぶ機会の提供」というのがありますが、もっと直接的に観光という科目を入れていただいたらいかがでしょうか、民間団体などが今後色々な取組を考えた時にご協力を要請するよりどころにもなっていくという考え方でよろしいということか、その点をお答えいただければと思います。

それによって「答申」に入れて欲しい部分もだんだん変わって来ると思います。

(佐藤会長)

もう1回整理させていただくと、今議論をお願いしているのは第1編の「現状と課題」の部分です。今の高野委員のお話もこういうところから流れて行くのだろうと思いますが、この第1編の第1章から第4章まで、それと第2編第1章の「長野県観光のめざす姿」まで、つまり具体的な施策の展開に入る前の認識の部分にご異議がなければ、今高野委員からお話のあった部分に進めていきたいと思うのですが、いかがでしょうか。

「現状と課題」についてはこれまでかなり時間を使ってご議論いただいているので、事務局の方でも随分時間をかけてまとめてくれたという印象がありますので、細かい部分は私と事務局の方で再度精査させていただいて最終案にしたいと思いますので、本筋が外れていなければということでありまして、いかがでございますか、他によろしいですか。

それではここまで皆様のご了解を得たということで、今日の本題であります「3編 施策の展開」、具体的にどうやるのだという中身に進みます。こちらは皆さんとの議論の中からキーワードを拾い上げた程度でして、先ほど高野委員がおっしゃったような、実現可能性も含めて、こうすべきだ、こうして欲しい、そんなことを含めた方向性がこの中に盛り込まれていくのだろうということで、これからの議論はこの部分に集中させていただこうと思います。

それでは第2編の「第1章 重点的に取り組むプロジェクト」から「第2章 施策体系」までについて時間を掛けてご議論いただきたいと思います。まず21ページの「プロジェクト1 世界水準の山岳高原リゾート」について、これは知事の意見もありましたし、今日のご欠席の松本委員のお話もありました。色々な意味で山岳をもっと活用すべきだという意見を踏まえてここに出てきているのだと思いますが、「趣旨」および「主な取組」に関してご意見等ありましたらお願いしたいと思います。

す。あるいは削除すべきという意見もあるかもしれません。

(高野(和)委員)

「山岳高原」とは長野県全体を捉えているのか、あるいはスキー場があるような山岳スポーツをやるところが山岳リゾートで、平地温泉地などは別個で考えているのか、その辺りを教えていただきたいと思います。

「スキー場・温泉地活性化モデル事業」というように、県の事業では名称を分けて使っていましたが、今回はどのように想定されているのでしょうか。

(佐藤会長)

「山岳高原リゾート」とは何かというところは、実は僕も気になっています。おそらく世界水準、あるいはアジアナンバー1のリゾートづくりということが、委員の皆さんの中でバラバラで、その姿がイメージできない。

そういう意味で、ここでは漠然と「山岳高原リゾートづくり」としたのではないかと考えていますが、基本的にはベースは長野県であり、お隣の富山や岐阜とかは広域で考えなければいけないだろうけど、長野県でその優位性を活かすと書いてありますので、こういった範囲でいいのではないのでしょうか。

それからリゾートの中身については夏なのか冬なのか秋なのか春なのかということも含めて、四季を活用した様々なアクティビティーということを描いていただいて、白、緑、茶色あるいは赤といったような、カラフルな高原リゾート。合わせてその中には温泉、スパも当然入ってくるでしょう。要するにそのような幅の広さを考えた場合、「主な取組」はいかにも漠然としていて、もう少し具体的に、じゃあどうやったらお客が増えるのだろうか、増やすためには今話題になっていた高齢者をどうやって受け入れるのか、お客はどういう人達を対象にしていくのか、というイメージが抱けるような取組をこの中で書いていかないとけないと思います。そのような意味も含めて、皆さんからご意見をいただきたいと思ったところです。

今高野委員から非常によい切り口をいただいたものですから、他の委員からもご意見をいただきたいと思います。この中にはエコツーリズムなど色々な観光の形が入ってくるでしょう。ですから間口を大きく書いているのだと思います。

事務局はこれに関して何かコメントはありますか。

(浅井観光企画課長)

実は私どもでも今研究中でございます。基本的な大枠とすれば全県が対象だと考えておりますが、メリハリの部分で地域を意識した取組も当然その中には入ってくるのだと思っています。

山岳高原リゾートというイメージですが、少しでも滞在時間を長くしていただきたいという思いがこの中に入っております、長期滞在を意識したネーミングになっております。

具体的な取組については、「主な取組」にありますように、やはりリゾートを使う

だけではなく、まずは大前提として環境保全、景観づくりにしっかり取り組んだ上でいかにお客さんに来て楽しんでいただくかという視点になろうかと思えます。3つ目の○では、訪れていただいた方に滞在メニューをたくさん用意しながら、来やすい使いやすい旅行環境を整備するということに取り組んでいきたい。それから4つ目の○では、ターゲットは日本人だけではなくて外国人の方達も十分意識する、こうした施策展開が必要ではないかと考えたところであります。

(佐藤会長)

この場で意見を求められても、皆さん何と表現していいかお困りかと思えます。次回の審議会で皆さんからご意見をいただく時間はありますか。

(浅井観光企画課長)

次回の審議会は11月の下旬に予定しております。

(佐藤会長)

それでは、そちらに回しましょう。

(高野(和)委員)

長野県全県を「山岳高原」1本でイメージづけるのであれば、映像で示せば、ポスターの後の方にスキー場のある白い山々があり、その麓に色々な温泉地が展開して湯気が立っているというイメージになるかと思えますが、今のこの内容ではそのようなイメージがなかなか想像できませんので、その辺りを内容を膨らませて全県下対応できるようにしていただきたいと思えます。

確かに戸倉上山田温泉のような標高350メートル位の平地温泉でも、首都圏からみれば長野県全体が「山岳高原」だと言えるのかもしれませんが。

以上です。

(佐藤会長)

ありがとうございます。

それでは、山岳高原リゾートというのはハードもソフトも含むでしょうから、そういう言葉を使いながら、「趣旨」の部分を分かりやすくなるように手を加えていただきたいと思えます。

まず3つのプロジェクトをカバーしたいので、プロジェクト2の「信州ブランドの磨き上げと発信による観光魅力の向上」にいきます。ここでは「信州ブランド」とは何かということが課題となりますが、プロジェクトの「趣旨」は、「対外的訴求力を高めるため、食や温泉資源、文化など多様性溢れる長野県観光の魅力的信州ブランドとして磨き上げるとともに、統一感をもって発信する。」というものです。

現在当審議会の議論とは別に、信州ブランド研究会において長野県のブランド力向上の研究が進められているのですが、そこで新しいブランド戦略が構築されるのを待つのか、「信州ブランド」をここで我々が議論してしまうのか、そういうところ

もありますが、このプロジェクトは観光魅力を向上させようというものです。
皆さんのご意見はいかがでしょう。

(中川委員)

私は3週間くらい前に東京に戻って、都内の広告会社やマーケティング会社、シンクタンク等の幹部を7人ほど集めて、「信州のイメージ」をテーマに半日くらいトークをやってきました。そこでちょっと気になることがありましたので皆さんにお伝えしたいと思います。

それは、東日本大震災前の長野県のイメージは、「日本のふるさと」「日本の原風景」といったイメージがありました。あの震災でそのようなイメージがかなり東北に食われているのではないかとことです。

ですから、長野県としては、「日本のふるさと」というイメージをもう1度強く打つのか、あるいは別な形で打って出るのか、いずれにしても信州・長野県はこういうところだという、これこそまさにブランド発信だと思いますけれども、それが今1番必要なのだと思います。かつての信州・長野県のイメージは、あるお味噌屋さんのコマーシャルで「お母さん」と叫んだところから始まっていて、その信州のイメージが漠然と薄れているということなのですが、CMづくりに携わる人からは、「今長野県に行ってCMをつくろうというイメージが湧かない。」という意見も出ていました。

今はそれくらい信州・長野県のイメージが低下あるいは劣化しています。それはたまたま時のタイミングなのかもしれませんが、今回のような全体の大きな取りまとめをする際には、外側からのマーケティングというのがまずあって、その上でこのような審議の場を設けるのが筋なのではないかという気がしました。

(佐藤会長)

ここで言う「信州ブランド」は、この審議会で新しい観光振興基本計画の方向性を固めれば、信州ブランド研究会の方でブランド戦略が構築されるので、その中で明らかとなるブランドイメージを長野県をあげて発信していこう、あるいは磨き上げていこう、そして観光の魅力を更に向上させていこうということを今後の長野県観光の政策の柱にしましょうということでございます。

こちらの審議会で「信州ブランド」がどのようなものかという部分まで足を突っ込む時間もキャパもないので、その辺りはご理解いただきたいと思います。

そうした前提で読んでいただくと、別途明らかにされるブランドイメージ、あるいは長野県らしさを対外的にどのようにアピールしていったらいいのかというのがこのプロジェクト2なのだと私なりに理解しているのですが、こんな理解でいいですか。

(熊谷信州ブランド推進室長)

ありがとうございます。当審議会におかれましては第2回の「ワールド・カフェ

方式」による審議の中で「信州らしさ」とは何かということについてご議論をいただきました。その中で、自然の美しさだけではなく信州人の営みそのものが重要であること、現代社会を生きるということに対して信州はどのように貢献していけるのかという見地からのご意見など、大変貴重なご提言をいただきました。今回のたたき台の中でも17ページの「長野県観光のめざす姿」の1番目、「信州暮らし」を楽しんで、発信しよう」という部分にご提言が活かされております。

ただ今中川委員から「信州とはどのようなところなのか、あらためて明確にすべき。」というご指摘をいただきましたが、現在信州ブランド研究会において「信州とはどのようなところか」というテーマを「信州暮らし」とダブらせながら検討しております。こちらの研究会でもとにかく自然に頼りがちなキーワードに落ち着きそうだったのですが、当審議会でものご提言などが背中を押していただきまして、今では、信州に暮らす人々の営みや、その営みが守り続けてきた信州の故郷の原風景がこれからの日本の未来風景になってくるのではないかという形で検討しているところでございます。

そのようなことをごさいますして、こちらの審議会での「信州暮らしを楽しんで発信しよう」という方向性と、ただ今産学官、メディア、26団体が参画する信州ブランド研究会の議論は同じような方向に進んでおりますので、信州ブランド研究会の議論も十分反映しながら、こちらの観光振興基本計画づくりに活かしていただきたいと思っております。そのためにもその進捗について皆さんにご報告させていただきますので、よろしくご理解いただきたいと思っております。

(岡庭委員)

私は今までの長野県観光というのは1に自然、2に歴史文化、3は交流と考えているので、その延長から考えると「世界水準の山岳高原リゾート」という部分はイメージが湧きません。その点では長野県の持っている自然を活用して、温泉やスキー、その他含めての観光のポテンシャルを上げていくことが重要なのではないかと考えます。

そう考えた場合、「山岳高原リゾート」という言葉は適当ではないのではないかと気がします。自然を活かしてきた長野県観光が今持っている力と、これから新しく観光需要を拡大していかなければいけないものは何かということ整理した上で、ネーミングを考えた方がいいのではないのでしょうか。ネーミングだけが先走っているのでもうまいかないのだろうと思っております。

2番目のプロジェクトは、信州ブランド研究会の議論をお話しいただきましたので、そちらの議論をもう少し見極めた上で方向性を出せばいいのではないかと思いますし、3番目のプロジェクトは人材育成や地域全体での取組で観光客を増やしていく内容だと思っております。

そのように私なりに考えると、この3つの枠組を進めてみたらどうかと思っております。それぞれのプロジェクトを考える際に、今までの長野県観光が持っているもの、足りないものはどんなものか、例えば3のプロジェクトでいえば、今注目を集めている体験観光は県内でも盛んであり、それは井上委員の努力の結果と考えていますが、

そのような長野県観光の持つ具体的なポテンシャルをどう磨いて次のステップにしていくのかと考えた際に、どのような言葉が浮かんでくるのかということだと思います。

3つのプロジェクトという組立自体は、私はいいと思っております。

(佐藤会長)

取り組む内容が重要ということでしょうか。事務局は今の岡庭委員のお話を理解できましたか。

(浅井観光企画課長)

ネーミングの先走りというご指摘かと思います。

ただ今お手元に「山岳高原リゾート」の関係で追加資料をお配りさせていただきました。長野県の観光を考えた時に何が1番の売りになるのか、またはどのように他県との差別化を進めるかと検討した際に、やはり雄大な山岳景観、さわやかな高原といった強みを今後しっかり活かさなければいけないと考えたのが発端です。山岳をこれまで十分に活かしていたのかという反省もございます。そういった点から長野県の強みを最大限に活かすという意味で、こうしたプロジェクトを提示したところでございます。

具体的に何をどのようにめざすのかということについては、追加資料をご覧ください。めざす姿は今私どもも試行錯誤しながら検討しているのですが、1つの例とすれば、やはりヨーロッパのスイスがやっていることが参考になるのではないかとということで、勉強させていただいたところです。

これを見ますと、アルプスの山岳景観の美しさは当然として、やはり町そのものが非常に美しく、清潔で安全であるというところ、また、そこには観光で訪れた際に楽しいアクティビティーがたくさんある、さらには外国人が訪れても分かりやすく気軽に自由に動ける旅行環境が整っているところ、こういった部分は非常に参考になると考えております。こうしたものを1つでも多く取り入れるべきではないかと考えました。

ただ、それだけではなかなか訪れてもらえないので、そこに行けば特別な楽しいことがある、何か違ったものが食べられるというような、そこならではの特色も必要ということで、スイスをお手本にいい部分は取り入れながらも、地域の独自性、地域ブランドも十分に高めていきたいというのが現段階での私どものめざす姿でございます。

(中川委員)

ちょっといいですか。参考になるかわかりませんが、スイスに安曇野市と友好都市の関係にあるサース・フェーという町があります。私も実際に2回程現地に足を運びましたが、もし長野県が山岳観光で真似をすべきとすれば、ホスピタリティー、お迎えの仕方のような気がします。それ以外はあんまり参考にはならないかもしれないですね。それぐらいお迎えの姿勢がきっちりしています。

(佐藤会長)

ありがとうございます。「山岳高原リゾート」という言葉が一人走りして色々なご意見がくるかと思えます。

山岳高原を活用したリゾートという解釈は多岐に分かれるのですが、「主な取組」にある「長期滞在のための質の高い過ごし方の提供」というのは、実は旅行会社がやることであって、交流や体験活動など地元の人たちがそのためのプログラムを用意しておけば、後は旅行会社が旅行商品として組み立てることになるのでしょうか。それがいいか悪いかは別です。その一方で、着地型の観光ということを考えると、地元の方でそういうメニューを一般化させてはいかがでしょうかと提案するというのも、これは新しい方向とすればいいだろうし、そのようなことを「主な取組」の中に位置付けておけば発展的に活用できると思えます。

ただ、問題をもう1回戻します。「山岳高原リゾート」という部分が問題でした。このネーミングについていかがでしょうか。

(高野(和)委員)

会長がおっしゃるとおりで、信州ブランド研究会の方でも検討を進めているということですが、この審議会でもこれまでの審議で「日本のふるさと」という言葉が出ています。そのイメージとリゾートは相入れない部分があって、この審議会で先に「山岳高原リゾート」を謳ってしまうと、それが長野県のブランドイメージとして固まってしまい、信州ブランド研究会が後から「日本のふるさと」と打ち出したとすれば、整合が取れないのではないかと危惧します。ですから、ブランドの研究会の方で信州ブランドの検討を深めるというのであれば、こちらでは「山岳高原リゾート」と限定せずに、もう少しオブラートにくるんだ「山岳を利用した何か」というような表現に止めておいた方がよろしいのではないかと思います。そうすれば、先ほど岡庭委員がおっしゃったような部分を加味しても不自然にはならないのではないのでしょうか。

1つ目のプロジェクトがあまりにブランドを謳ってしまっているので、2つ目、3つ目のプロジェクトとの関係が難しいと思います。

(佐藤会長)

ありがとうございました。

岡庭委員、今の様なコメントでよろしいですか。

(岡庭委員)

これからは、団塊の世代以降の人達が観光に訪れるわけですし、私どもの村を訪れる観光客も村内の富士見台高原、日本百名山である恵那山に行く人は飛躍的に増えています。その中心は、実は男性ではなく、女性なのですが、これらの山々は山岳というよりは「里山より少し高い場所」というイメージだと思います。ですから、「山岳高原」といった場合に、それがこれからの観光ニーズにピッタリ合うのかと

いう点でちょっと違和感があったということです。

(佐藤会長)

分かりますね。ではこの表現をもう少し修正するということをお願いします。

総合5か年計画の方でも「山岳高原リゾート」という表現を用いているのでしょうか。

(浅井観光企画課長)

現段階では使っています。

(野池観光部長)

使っていますが、調整の余地はあります。

(熊谷信州ブランド推進室長)

ブランドの観点からしますと、やはり信州にある価値や伝統を十分に活かしたいと思っておりますので、いきなりヨーロッパ的なもの、アメリカ的なものが落下傘的にポンと入るのではなくて、信州らしい健康長寿やおもてなし、長野県がこれから狙っていく自然エネルギーや省エネルギーなど、そういった観点を入れながら、これから世界に名だたるものにしていけないかという意見を出しております、今プロジェクト間で調整をしているところでございますので、その辺りは総合5か年計画でも許容する範囲になっています。

(佐藤会長)

この審議会では、具体的に絞り込んで記載するというよりは、そこから派生して様々なことが考えられる、その範囲で実行されていけば基本的にはこの審議会の答申に沿っているのだという見方をしたいのです。そうしないと、限りなく箇条書きしなければならなくなるので、要するにプラットフォームとしての審議会という感じで考えたいと思います。そう考えると絞り込むような言葉というのはできるだけ避けた方がいいという意味で、やっぱりふるさとの、信州らしい言葉をどこかで使った方がやはり安心だと思います。その辺り、もう1度文章を練ることにしましょう。

プロジェクト2と3について、先ほど岡庭委員から人材育成や体験についてご意見がありました。体験というものは幅が広いものですから、言葉として使えるだろうと思います。それから、もう1つ、高齢化を踏まえて高齢の方向けの受入体制も長野県としてはいいのではないかと私は思います。長寿延命社会などといわれていますから、そうした高齢者向けの観光のあり方、これは長野モデルができれば、おそらく世界唯一の形になっていくような気がしますので、その辺りをこの中に埋め込んでもらえたらと考えるところです。

他になれば24ページ以降の「施策体系」に進みたいと思います。ここも結構具体的なもの、抽象的なものが色々出てきますが、先ほど私が申し上げたような視

点で抽象性は受け止めていただくということでご理解いただき、その前提でご意見を頂戴したいと思います。

事務局の方の皆さんにちょっと質問なのですが、資料5に「委員からの施策提案」というのがありましたが、私と松本委員が提案した観光の高付加価値化、基盤づくり、誘客・交流の促進などの提案はどこかに盛り込まれるのですか。

(浅井観光企画課長)

ご提案の内容により、具体的な施策につきましては、今後私どもで計画を書く段階で参考にさせていただきながら、取り入れていきたいと考えています。方向性については、答申に極力反映するような形で取り組んだところであります。

(佐藤会長)

例えば27ページに「3 来訪者にやさしいハード・ソフト整備」という施策分野がありますが、今回私の電気自動車(EV)の活用という提案が紹介されています。長野県の価値観を何か形で表現しようとするれば、例えば小水力発電やEVの活用ということが考えられますし、あるいは特定の地域に特化するかもしれませんが長野県として無線LANを取り入れてもいいのではないかと思います。そういうことは、やれるとすれば、具体的な施策の中に落としていくということでしょうか。

(浅井観光企画課長)

はい、その場合は、同じページの2つ目の○にあるように「ICTを活用した情報提供、…来訪者の利便性や快適性の向上」という形で答申では記載させていただいて、具体的には計画の中で謳いこんでいくということになります。

(佐藤会長)

分かりました。このようなことですので、皆様のご意見をいただければと思います。

まず25ページの「人材の育成」、これは子ども達への教育ということも含めて観光を担う人材を育成するというものです。それから26ページでは「観光の質の向上」ということですが、まだありそうですね。27ページの「ハード・ソフト整備」は今話題になった分野。それから28ページは「誘客・交流の促進」、MICEやスポーツ合宿も含まれていますし、フィルムコミッションの取組もあります。

(岡庭委員)

「3 来訪者にやさしいハード・ソフト整備」の分野ですが、これからは特に広域観光が重要になると思います。これからは1か所に行ってそれで満足するというのではなく、1回の旅行で複数の体験をして満足したいという旅行者が増えると考えられるので、やはり広域観光の視点が重要だと思えます。それを可能にするのが公共交通であり、長野県観光は公共交通が非常に弱いので、ここを強くすれば、もっと長野県全体を観光客が歩いてまわるようになるのではないかと思います。ど

ここに表現をしていただければと思います。

(佐藤会長)

私も基盤づくりとして「県内の観光地や観光資源を有機的に結びつける交通システムの構築」を提案させてもらったのですが、やっぱり1番の課題はここですね。高齢者や東京の若い人達は車を運転しませんから、移動手段を確保できなければかなり市場が狭められてしまいます。

それからその前段では体験と広域観光の組合せのお話がありました。そこで長野県は1回で2度おいしいという提案の仕方があっていいでしょうね。

ありがとうございます。他にございませんでしょうか。

(高野(和)委員)

前回もご報告させていただきましたが、上小で開催した地域懇談会で話題になったお話が2つあります。

1つは北陸新幹線金沢延伸のことが28ページに書いてありますが、新幹線駅から各観光地への交通がしっかりしていないと、単なる魅力のない通過地点になってしまうのではないかという危惧がだいぶ出ておりました。上田駅に降りた方を各地にうまく輸送することを考えておきませんと、延伸時に逆に厳しくなるのではないかということがありますので、その辺りをここで考慮していただきたいと思います。

もう1つ、27ページに「観光情報のデータベース化」と書いてありますが、懇談会で出ていた意見は、例えば各観光協会がウェブサイトをつくって掲示する、各市町村もホームページをつくって掲示するということだと、観光に訪れたお客さんは使いづらいということでした。その懇談会には以前JRとシナノ鉄道、それぞれの軽井沢駅の駅長だったお二人に出席いただいていたのですが、年間700万のお客が訪れる軽井沢なので県内各地の観光地のことを聞かれるということですが、お二人ともなかなか紹介しづらかったとおっしゃっていました。データベース化はそれぞれの部署でやるのかもしれませんが、長野県統一のデータベースがあると、いずれの駅、市町村、観光協会であっても同じものを見ることができ、お互いに各観光地の見どころや行き方を案内できるようになれば、長野県は他の地域に比べて突出したホスピタリティーがあるところと映るのではないかというお話が出ていましたので、その辺りもちょっと膨らませて反映させていただければと思います。

(佐藤会長)

ありがとうございました。

他の委員の皆さんはご意見ありませんか。今議論している「施策展開」の後の達成目標や役割分担まで広げていただいても結構です。その辺りまで含めてご議論いただければと思います。

(今井委員)

昨日から資料を見ていまして、皆さんのお話も聞きながら、私は言葉や説明が難

しすぎるのではないかという印象を持ちました。

私は今、夏からずっと、県のパンフレットなどを持ちながら、長野県内を旅をしているのですが、そこで感じるのは長野県というのは不便だなということです。でも、観光地に行くとなぜかご年配の方、自分で車を運転しては来られない方がすごく多くいらっしゃるって、それはだいたい観光タクシーの運転手さんがいて、その方達が連れて来て下さるということでした。その運転手の方にお話を聞くと、ほとんどの方が介護の免許を持っていたり勉強したりしているということでした。それを売りに年配の方達を誘致してそういった場所に連れてきているとおっしゃっていました。

多分そういうことって自分で旅をして現地に行ってみないと分からないことだと実感して、これは机の上でこうやって議論しているよりも、そういった場所に行ってみるのも1つの取組なのではないかと感じています。

それと今私はホームページに、顔の見える信頼できる情報として、長野県の記事をアップしています。文章を考えるのがすごく難しいのですが、ちょっと困った時に検索すると一般の方でも結構色々と投稿されている方がいて、知らないのはこうやって話をしている自分達だけかなと思いき、勉強不足と感じていますので、もっと優しく、自分達の目線にあった、身の丈にあった文章にしたらどうかというのをずっと感じている次第です。

(佐藤会長)

ありがとうございました。

お役人がつくるとこうなるという典型的な文章になってしまっているのだから、確かに計画はつくったら県民も読むわけですから、そういう意味では相手が小学生でもおじいちゃんおばあちゃんでも分かるような表現を、文字の大きさも含めてですが、是非考えていただきたいと思います。

今の今井委員のお話の中でタクシーのことが出てきました。観光における人材育成でどこが一番重要なのだろうというのと、よく聞くのは、まさにその町の入口にあたるタクシードライバーなのです。タクシードライバーがどう対応するかによってその町の印象がすべて決まってしまうといわれます。タクシーの運転手に愛想がないといったら、その町全体に愛想がないということになりかねないので、ここの人材育成及びソフトの部分、とりわけこれから増加する高齢者については、僕もその辺りをなんとか強調したいなと思っていました。バリアフリーという言葉で簡単に片づけてしまうのだけれども、実はその中には色々なバリアがあって、とりわけ高齢者においては今トラベルヘルパーという職業が社会的に認知されるようになってきましたので、それを県レベルで、行政単位で何か考えているところがあったら、おそらくこれは自然と合わせて、他に例のない「ならでは」というのができるのではないかと感じます。これはタクシー、バス、電車すべての乗りもの関係において、あるいは施設、美術館とか芸術館とか何でもいいのですが、そういう場所においても、同じような条件が出てくるのだろうと思います。

そういう意味で横断的に、ここでは縦割で①～④と出ていますが、横断的に考え

なければいけないという意味で、高齢化をキーワードとしたバリアフリーだとか、健康をキーワードにした食だとか、何かそういうことがあってもいいのかなということを感じながら、今井委員のお話をうかがいました。どうもありがとうございます。

(久保田委員)

「山岳高原リゾート」という記載には違和感を覚えましたので、先ほどの皆様のご意見を踏まえて、ご検討いただければと思います。

それから、やはり同じように、伊那谷は公共交通が特に発達していませんので、今井委員が飯田の遠山郷に行ってください、「遠いところね。あんなに遠い地域はないわ。」と開会前にお話ししてくださったのですが、そこに行くだけでタクシーでも1時間かかるのです。多分お仕事で行かれたのかなと思うのですが、一般の人にはタクシー代をかけてまで行けない観光地が非常に多いので、公共の交通網というのは非常に重要だと思っているところです。

それから、29ページの「外国人誘致戦略」の「主な取組例」として「松本空港の活性化の取組」とありますが、これは国際チャーター便のことなののでしょうか。といいますのは、その前ページの「誘客・交流の促進」にも松本空港は入ってくるのではないかと考えております。

(佐藤会長)

そうですね。縦で切るのではなくて横に繋ぐと空港の問題なんかも出てきますね。

(塩島委員)

自分のイメージと全然違いましたので、先ほど中川委員がおっしゃったみたいに、外側から感じていらっしゃることを聞くのがすごく大事なのだということを感じました。特に私が今関係しているのが白馬村なので、「山岳リゾート」という言葉に対して皆さんほど違和感はありませんが、中川委員がおっしゃったように外の方がどう感じていらっしゃるかということに耳を傾けるのはすごく大切だと感じました。

また、高野委員がおっしゃったように一定の方向性があるということ何か統一するツールが必要だと思います。誰が見てもそれを手に取れば分かるような、例えば表紙だけは統一したものがあって、ホームページでも何か統一してあげないと外の方に対してはあまり優しくないのかなと感じました。

(佐藤会長)

何かこれとこれを統一すべきという、具体的なものはございませんか。

(塩島委員)

例えば人材の育成にしても、これからどういう形で育成なさるのか何か資格のようなものをつくるのかということなのですが、それはそれとして、パンフレットにしても長野県観光のイメージづくりの一環であるということがはっきり分かるよう

に、例えば表紙だけでも全部統一されて、長野県観光のイメージの一環として伝えられればいいと感じます。

例えば、私どもの白馬村に関していえば、「白馬バレー」として大町から小谷村まで、まさに「山岳リゾート」で売っていかうというイメージがあります。そうした際に、現在は行政がかわればパンフレットが全然ばらばらなので、表紙だけでも統一されればよいのではないかと感じます。

(佐藤会長)

宣伝戦略の一環として、そういう入口的な情報ソースについては統一した方がいい、それを「長野県」とするのかブランド名にするのかはともかく、統一するというアイデアをこの中に入れた方がいいということですね。

(塩島委員)

そうですね。情報発信のツールに統一したアイキャッチャーが必要だと思います。

(佐藤会長)

長野県では広大な県域を10の地区に分けています。その中でさらにそれぞれの市町村が観光振興に取り組んでいるわけで、今の統一したものをつくるべきというご意見を是非受け止めたいと思います。

他にご意見はありませんか。

(竹村委員)

初めて参加させていただいて、本当に勉強になると感じています。

先ほどのバリアフリーの話で言いますと、JRの専門の社員は、今サービス介助士という資格をとって、お体が不自由な方だとか色々な方への対応ができるように取り組んでいます。

それから、交通事業者としては「おもてなし」が重要だと感じています。お客様との接点が短時間で終わってしまうという事はありますが、やはりそういう場面で色々なご案内をすると、交通関係に従事している社員が長野県のことをなかなか知らない、地域のことをなかなか知らないという状況があります。ですから、外からお客様を誘致することも大事ですが、人材育成について先ほど今井委員からお話があったように、長野県の中でもっともっと色々な地域のことを知るといことも重要なのではないかと感じております。

例えば、北信地域の人が上高地にどれくらい行っているのかというと、そんなにたくさん行っていない。立山黒部アルペンルートを富山県側に抜けている人がどれくらいいるのかというと、それは私にも分かりませんが、そういうことをもっとやっていくべきではないかと感じます。つまり、長野県全体の中での県内流動のようなもの、県内でもっと交流があってもいいのではないかと感じているところです。

(佐藤会長)

確かにそうですね。

(渡邊委員)

私も大町ですので、塩島委員と同じように「山岳」という言葉にはあまり違和感を抱きませんでした。

それから、資料3の概要を見ていまして、現行の計画をつくった際に、「もう1か所、もう1泊…」という合言葉がございましたよね、やはり大きな目標を何か一つ統一的な形で示すことができれば、見えてくるものがはっきりするのではないかと思います。

それと、1番感じていることが、資料4の21ページに書かれているように、ここ長野県は色々な面で世界に匹敵する資源を保有しているはずですが、やはり質を高めるということが重要だと感じます。質が低いばかりに選ばれる観光地にならない、不満が高まり安売りをするという流れから脱却するため、どうしたらいいかという辺りを模索しているというのが現在の状況ではないかと感じています。

長野県に毎年1回は来るご夫妻が結構いらっしゃって、「来たことによって自分の価値観が少し高くなる。」「この癒される時間が、お金と時間をかけてもわざわざ来る価値がある。」とおっしゃっていただいています。田舎らしい生活の中で、大町あたりでまだ問題になっているのがトイレの問題です。「田舎の経験をしてみたいけれども、あのトイレは嫌だ」というのが99%、田舎生活を希望する人達も、「あれだけは嫌だわ」と答えています。選ばれる土地である、オンリーワンの土地であるという選択をしっかりといただくためにも、他とは違う質の高さが必要だと思いますので、その辺りが1つのキーワードになるのではないかと感じます。

(佐藤会長)

分かりました。ありがとうございました。

(井上委員)

これは全体的なことになるかと思いますが、誰が何をどのようにやるのかということ、ここの中でももう少し明確に示していくといいのではないかと考えています。

それから、プロジェクトについては皆様のご議論でよろしいと思うのですが、課題としてこの中で県の観光協会の体質改善というのが何も出てきていません。実はこの観光協会が体質改善を図らない限り、いつまでたっても信州の観光は良くなりません。ここら辺りを、人材育成でやるのかどうか、ある程度強めに出す必要があると思います。そういう中で岡庭委員が言っているように、広域観光を進めて、お客さんを滞留させて回していく必要があります。

さらに、バリアフリーについても非常に重要な視点でして、これからどんどん高齢化していくと高齢者が1番のマーケットになりますから、施設的なバリアフリーはなかなかお金がかかりますが、県民1人1人の心のバリアフリー、段差があったら助けてあげればいいのかというホスピタリティをいかに醸成していくかという方向

性を明確に打ち出せばいいのではないかと感じております。

(佐藤会長)

ありがとうございました。委員の皆さま方全員から色々なお話をうかがって、答申の流れについては概ねご異議はないという感じで、そこにそれぞれの段階で付け加えていくもの、渡邊委員がお話しした質の問題もありましたし、井上委員からは誰が何をどのようにやるのかという主体の問題、結果的には誰が責任を取るのかというところに行きつくのかもしれませんが、そのような問題もどこかに付け加えていくべきではないかというご指摘がありました。

そういうことで、観光振興基本計画の答申としては、概ねこのような流れで進めていこうと思いますが、そこに後は個々の問題として、例えば「山岳高原リゾート」という言葉が適切なのかどうかということも、事務局でもう一度検討していただいて、今日の議論を反映していただくような修正を加えてもらうことが必要です。それから、信州ブランド研究会にお任せしている長野県のブランドイメージの方向性をこの中に埋め込むことも、研究をしていただきたいと思います。そんなところを含めて、本日のたたき台を基にこのような内容になりましたというものを、次回は答申(案)という形で提案していただき、ご審議いただくことになるかと思っております。

それから、残った議論があと2点程ありまして、その一つが参考資料3の「役割分担の基本的な考え方」です。井上委員が県の観光協会の問題を取り上げていただきましたが、役割分担のそれ以外の部分になかなか触れにくかったと思います。基本的にはやはり住民の皆さんが主体となり、それを事業者や行政の皆さんがサポートしていくというのがよい形なのではないかと思っております。事務局からの追加資料にスイスの例が出ていましたが、スイスがなぜうまくいっているのかということ、直接民主制だからうまくいっているのでありまして、これを間接的にやろうとするとどうしても時間やお金がかかってしまったり、あるいは組織的に流れがスローになってしまいます。スイスの観光で必ずやることは住民会議というやつで、レファレンダムによってみんなで決めていく、コンセンサスをみんなで取っていくというやり方になっているから話が進みやすい、決まったことにはみんなが協力するという形になっています。長野県でもそのような住民参加ということが可能であれば私はいいと思っておりますが、まだそういう段階ではないとすれば、誰が、何を、どこまで、どのようにやるかという役割分担は、かなり重い議論になっていくのではないかと思います。その議論にまとまった時間を割くことは難しいのですが、この参考資料3について皆さんのご意見をうかがえたらと思っております。

県民等に期待する役割というと、先ほども「おもてなし」やホスピタリティーということがありました。「おもてなし」というのは強制してやるものではありませんから、ちょっと手を出してあげればそれで済むことを、急いでいるからと自分はその場から外れてしまうということがあります。それもお金をもらってやるものでもなく、どうしてもボランティアな心の動きによる部分なので、それで「心のバリアフリー」という言葉が出てきたのだと思っておりますし、そういうことも含めた県民教育は当然必要だと思っております。ではその「心のバリアフリー」ということを一体誰が教

えるのかということをおはいつも思っております。身につけた対価は何か、それはお客様の微笑みだったり「ありがとう」という言葉だったりするかもしれない。だけど誰がそれをやったらいいのかというのが難しい、微妙なところであるわけです。

その他、観光事業者に期待する役割、一般の事業者や観光協会、それから県の役割ということがあるわけですが、その辺りの分担は団体がある以上は各団体に少しずつ負担していただくということではないのかと考えていますが、やはり、それ以外にまずは住民の皆さんに興味を抱いていただくところから始まるのだらうと思うので、大上段に役割分担と構えるのもちょっといかがなものかなという感じがしないではありません。

皆さんのインプットを是非お願いしたいと思っておりますけれども、いかがでしょう。

(岡庭委員)

佐藤会長が施策提案の中で、基盤づくりとして観光産業についてかなり触れていただいておりますが、これをどのように表現するかということは非常に難しいことだと感じます。先日私は山ノ内町で観光の話をしたのですが、各市町村では旅館業を維持するためにかなり公費を投入しています。そのような中で、長野県の温泉観光地や旅館業というのはかろうじて維持されてきているということをお、我々ほどのように考えたらいいのかというのが1つあると思っております。長野県の中に持続的な観光産業をどのように確立していくのかということは、これはどのようにすればいいのか分からないのですが、組立てをしてもらいたいということがあります。

2つ目は、以前知事が変わった際に、長野県の観光行政をなくして、県観光協会だけに一元化した時期がありました。その後、県に観光部が置かれて現在のような県としての観光行政の骨組ができたわけですが、その一方で県観光協会の役割についてすみ分けをどうするのかという議論が必要ではないかと思っております。先ほどの井上委員のお話にもありましたが、答申(案)たたき台の第5編には県観光協会の役割ということが書かれているので、私はそろそろ協会を強化して、もっと民間活力として長野県観光に責任を持ってもらう方向で転換していただく必要があるのではないかと思います。そういう点で、今回の答申の役割分担の中で、協会の果たす役割はもっと大きくなっていくのではないかと考えるので、そこのところをうまく実効性のある形で表現をしてもらいたいと思っております。

(佐藤会長)

ありがとうございます。

ただ今のご発言には2つポイントがあります。1つは宿泊産業についての方向性をどうするかということ、もう1つは県観光協会の役割についてのご指摘でした。

僕が答えていか分かりませんが、宿泊産業の部分については、僕は宿泊産業の方で答えを出してもらえないかと思っております。ちょっと投げやりかも知れませんが、実は今までそこが欠けていまして、景気のせいにしてたり、色々なことを考えている余裕がなかったのだらうと思っております。その中で、やはり特に長野県の宿泊産業の場合は、自分達で、「行政に頼もう」とかそういう形ではない答えを出しても

らいたいと思っていて、それが生き残りの唯一の鍵だと僕は考えています。自分達で答えをどのように出すのかは、色々と紆余曲折があろうかと思いますが、そういうことから考えて、宿泊産業の皆さんがその辺りについて深刻に議論を詰めていただき、答えを出すことを目的として会議をしていただきたいと思います。

それから県観光協会の強化について、これは田中康夫知事の時代に役所に観光行政の役割を持たせずに協会の方に大きくシフトする、それにより民に近いところではできるだけ民に近い人達がやるということで、観光協会の守備範囲を広げたのだと理解していますが、井上委員がおっしゃったようにいつのまにかそれがまた戻ってしまっている。人的な関係もしかり、事業の割振もしかり、予算の内容もしかり、ということで自立的な取組ができにくい、この辺りを今後どう考えていくのかということは、これもまた僕は県観光協会でも議論してもらいたいと思っています。以前、松本でこれをやらせまして、議論させて、会員に頼らずに自分でお金を稼ぐべきだということを提案させてもらいながら、そこには南信州のモデルがあったわけですが、そういうことから観光協会の役割というものが自発的にもっと前面に出てくればいいと思うのです。これは俺達の仕事だと言ってくだされればそれなりの存在感があると思いますが、単に言われたことだけを遂行するだけでは、協会としてはもったいないという感じがしています。

ただ今の岡庭委員のお話を踏まえて僕が長く話してしまいました。他にご意見があればお願いします。

(高野(和)委員)

ただ今の会長のお話は全くそのとおりでございまして、そのような中で自助努力に向けた勉強をするために、昨年11月に県の旅館ホテル組合会青年部の役員全員を対象とした勉強会を行いまして、そこで過去私自身が社長になってから16年間の借入金、利益、売上げを全て発表して、売上げや利益のアップダウンがある中で、どのようにしのいできたのかということをしてレクチャーしました。

ただ、私どもの組合会の加盟旅館も1,001軒ありまして、加盟していない施設を含めると6,000軒あると言われていまして、6,000軒すべてに心を悟っていただいて、自助努力で何とか切り抜けていただくとなるとなかなか難しい部分があります。

ですから、自助努力ということについては参考資料3の観光事業者に期待する役割の中で「自らの企画力と経営力を高め」という記載で既にご指摘いただいておりますが、組合会の努力だけで6,000軒の仲間を救うことはできないので、私としてはここに「金融機関の役割」という記載も加えていただくとありがたいと思います。

(佐藤会長)

そこまで僕らが議論していかどうか分かりませんが、6,000軒救わなければいけないのですか。

だから、結局はそういうことなのです。これはスキー場についても同じで、もっと大きな問題が控えているわけです。そちらでも全く同じような議論があるので

が、金融機関の人達と話しても、今までは日本らしい心情的なお付き合いになっていて、そこから先はどうも進めないというお話を聞きます。

ですから、後はありうるとすれば、10 や 20 の成功事例を出してもらえれば、それを参考にして「我々も」と考えていただき、動く、動かないということも含めて、どこかでふり分けをせざるを得ないのではないかと、僕は個人的にはそのように感じています。

(高野(和) 委員)

多分、金融円滑化法が終了となる来年4月以降にある程度の結果が出てしまうと思いますが、私の立場としてはあくまで業界全体の救済が目標ということですので。

(佐藤会長)

それでは、もしありうるとすれば、この中の「一般の事業者」のところですかね、観光に関連するということで、「金融」とは書かないけれど、「周辺産業の理解と協力は期待したい。」というような具合ですかね。

残り5分となりました。それでは最後になりますが、参考資料4の「計画の検証・評価の考え方」ということで、目標については現行計画の達成目標の進捗について前段でご議論いただきましたが、あの目標はこれでリセットされるのですか。

(浅井観光企画課長)

新しい計画で何を達成目標にするのかという論点があります。現行計画の目標を継続するという判断もあるでしょうし、違う指標を使うという判断もあります。要するに、めざす目標は時代に応じて若干変わってくると思いますので、その辺りのご議論をいただければと思います。

(佐藤会長)

ここでそういう提案をしなければ、5年前に設定した達成目標も消えてしまうということですか。

(浅井観光企画課長)

できれば「このような指標が適当」、「このような考え方で設定したらいかがか」というご提言をいただくとありがたいと思います。

(佐藤会長)

分かりました。それでは達成目標と計画の検証・評価についてお願いします。

検証と評価、つまり計画のモニタリングに関しては、今現在観光部からこうして審議会に進捗状況をご報告いただいていますので、そういう形が今後もありうることが1つ。2つ目は委員の皆さんの方から独自に、これが全然進んでなさそうだよ、これはどうなっているのかと、個別のアプローチをしていただいて評価していただく、3つ目は観光を研究している大学のような第三者に客観的に見てもら

って評価してもらおうということ、このようにいくつかやり方があるかと思うので、このうちのどれということではなく、複合的に使えばいいような気がするので、その辺りで検証と評価については産学官が協力して行うという程度に留めていただくといいと思います。

それから、達成目標について少しご議論いただきましょう。達成目標をいかがいたしましょうか。目標はどうあるべきか、ハードルの高い目標を設定するのか、それとも努力すれば達成できる目標を設定するのか、こういう仕切りの仕方が1つあります。もう1つは現行計画の達成目標のように「語呂合わせ」という方法もあります。何を達成するかという指標、参考資料1には達成指標の候補として7つあげられていますが、来訪者数だとか消費額だとか外国人旅行者数だとか、そういった分野で設定すればただ今お話しした評価と繋がりますが、こうした拾いやすい達成目標をセットするのか、それとも、例えば小学校で観光を勉強している学校数というような、ガイドライン的な決め方、つまり長野県独自の数字でやるのか。色々な設定方法があるかと思いますが、この辺りはいかがでしょうか。

(井上委員)

私は、達成目標は1つでいいと思っています。

つまり、目標年度までに観光でどれだけの人が食べられ、雇用が発生したかという1点のみでいいと思います。それを大事にしないと、観光客数が増えたとしてもゴミと尿を置いていくだけの人はいらぬわけで、お金を置いていってくれる人が重要であり、それによって食べられる人が何人できたかということが1番大事ですから、その点だけでいいと思います。その他は分析して課題を把握するために満足度などのデータがあればいいので、目標とすべきものは一つだけでいいのではないのでしょうか。

外国人であろうと日本人であろうと誰が来てくれてもいいのです。落ちる金がこれだけという、それだけでいいのではないかと思います。

(佐藤会長)

はい、ありがとうございます。

いかがですか。達成目標を設定する際には、何のために達成させるのかという大きなゴールが必要だと思います。ただ今井上委員は経済効果ということをおっしゃってくださいました。じゃあ、それが何のための経済効果で、何のために役に立つのかという議論なのです。

つまり、この観光審議会ですら練り上げる答申案をみていると、誰のためにこれをつくっているのかということがあって、それを評価するのがこの達成目標なのです。それをいくつかの段階で細かく、この指標、この指標と見てきました。それで、今井上委員は経済効果だけみればいいじゃないかというご意見です。それは何のためにという、その経済効果が出た際に県民全体にとってプラスだったのだという結論にならないと、特定の業界だけが儲かったということに留めてしまうと、なかなか、何で小学校で観光を勉強しなければいけないのだということの答えになってい

かないと思います。

だからその辺りで、どういう達成目標にするのがいいのかということ、やはり考えていただいた方がいいような気がします。

1つ目として経済効果という意見が出ました。後はいかがですか。

(岡庭委員)

現行計画はテーマがはっきりしていたのですよ。「観光立県長野」の再興がテーマだったから長野県観光のピークの時に近づけようというのがまさに計画の達成目標であり、色々語呂合わせかなんかをして設定をしました。

その計画をもう捨てるのか、「観光立県長野」の再興をもう投げ出すのかという議論にもなってくるので、審議会としては非常に難しいところだと思います。

(佐藤会長)

それで僕もさっき事務局に聞いたのです。現行計画の目標を捨てるのですかと。

(岡庭委員)

そういう点から言うと、「観光立県長野」再興という現行計画はやはり堅持した上で、ただ今の井上委員のお話も考慮してそのような実績数字も加味して、県の方で設定していただいたらどうでしょうか。

(佐藤会長)

今回の計画づくりの審議の中で 1.48 倍という経済効果の数字が初めて出ましたよね。

(岡庭委員)

そういう点で、観光消費額がどのような形で長野県に経済効果を及ぼしているのかという数字も出していただいているので、それも加味してここで目標数字を言っても、それはどういう根拠だという話になって来るのだらうと思います。

(佐藤会長)

今の岡庭委員のご提案、いいですね。

(浅井観光企画課長)

方向性をお示しいただければ、数字的なものは事務局の方で色々と考えたいと思います。

(佐藤会長)

そうですね、具体的な数字は、事務局にお任せいたします。

(浅井観光企画課長)

現行計画の審議でも、こういう指標を使ったらどうかというご提言に留まっておりまして、達成目標の数字的なものは答申には入っておりません。

(佐藤会長)

前回も入れていませんよね、それは事務局で設定するという事で進めさせていただこうと思います。

以上、本日の議題を処理してまいりました。次回の日程と今後のスケジュールについては事務局の方からお願いします。

それでは、これで本日の審議は終了ということで、議長の任は外させてもらいます。後は事務局の方でよろしくをお願いします。

どうもありがとうございました。

(浅井観光企画課長)

では次回以降のスケジュールについてご説明させていただきます。

第5回の審議会を11月19日月曜日の午前10時から開催させていただきたいと思っております。委員の皆さんにスケジュールを確認させていただきまして、1番出席者の多かった時間帯ということで、19日の10時開会ということでお願いしたいと思います。これが最終会となる予定でございますので、ご出席についてご協力をよろしくをお願いしたいと思います。

なお、最終の審議会では答申(案)をご提示をさせていただきご議論をいただくのですが、審議の場でいただくご意見を踏まえた修正をしたうえで、知事への答申をいたします。それは11月の末から12月上旬、多分12月上旬になろうかと思っておりますが、会長さんと日程調整をさせていただきたいと思っております。

日程的には以上でございます。それでは、本日は長時間にわたって大変ありがとうございました。以上を持ちまして、長野県観光振興審議会を終了とさせていただきます。

どうもありがとうございました。